

『親鸞』

2016年07月13日

「親鸞」は、日本の宗教家の中で最も愛され、尊敬されているのではないか。私も宗教との出会いは親鸞の『歎異抄』であった。弟子の唯円が親鸞の言葉をまとめた小さな本であるが、深い感銘を受けた。親鸞の浄土真宗のお寺を訪ねたが、住職があまりに高齢であったので、高名な僧であると聞いた臨済宗のお寺に通うようになった。そこで、教会を知っているかと言われ、教会に行き始め、クリスチャンになり、牧師になる決心をした。

『歎異抄』は今なお、多くの解説、訳本が出版され、親鸞に関する本も次々に出版されている。今年の6月、三田誠広氏が『親鸞』を上梓している。記録が乏しく、正確な伝記は書けない。親鸞が書いた経本と諸々の資料を突き合わせ、小説として書いている。従って、著者の興味や思い入れによって、それぞれの親鸞像を作り出し、多様な描き方をしている。読み比べてみると、かなりの違いはあるが、基本的には変わらないであろう。

三田氏の『親鸞』は、平安末期から権謀術数が渦巻き、親子兄弟が血を血で洗う貴族や武士たちの戦乱を背景にしている。仏教者間の抗争も激しいもので、庶民も巻き添えにされ、天災も加わり、命が保障されない「末法の世」であった。その中で、煩惱具足の悪人に極楽浄土を約束する教えを切り開いていく親鸞像をダイナミックに描き出している。

親鸞は、源頼朝の甥と言われ、源平の争いから身を守るため、また、母親の遺言によって、9歳の時、慈円の元、仏門に入る。優秀な子で、諸々の経典を読み、身につけていく。11歳の時、最高の学識と権威を誇る比叡山に入る。ここで20年間、勉強と命がけの修行に励む。しかし、確かなものが得られない。そのような時、浄土宗の法然と出会う。法然は、いたいけな若者を殺したことに苦しんでいた東国の武士・熊谷直実に教えを説いたと、親鸞に下記のように語っている。「ただ阿弥陀仏の名を唱えるだけで必ず往生できると説いてやると、それだけで心の底から安堵して涙を流し、喜びに肩をふるわせて号泣した。念仏の功德とは、このようなものじゃ。義は要らぬ。理屈で説明せずとも話せばわかる。念仏を語るには無義をもって義とする。これが浄土の教えじゃ」。親鸞の開眼となり、法然を生涯の師とする。パウロはガラテヤ書2章16節で「けれども、人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました。これは、律法の実行ではなく、キリストへの信仰によって義とさせていただくためでした。なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないからです」と書いている。1,200年ほど時代が下がる法然はパウロの弟子と言えよう。

法然から「親鸞」という名をいただき、肉食、飲酒、妻帯しても地獄に落ちることはないと言われ、法然を介し、摂政関白の九条兼実の末娘・玉日姫と結婚する。厳しい修行をする仏教者たちから、念仏を唱えるだけで往生するという教えは安直すぎると批判され、後鳥羽院から越後に流される。この時、恵信尼を妻にし、「愚禿」と名乗る。その後、東国に行き、布教活動をする。深い学識と積み上げた修行から生み出した浄土教の「念仏で浄土に行ける」という今を安堵する親鸞の教えは圧倒的な支持を受け、どこに行っても聖人さまと尊敬を集める。『歎異抄』に「弟子ひとり持たず候」と書いているが、親鸞は弟子を持たず「同行」と言った。「悪人正機論」に関し、三田氏は「悪を重ねるのは信心がないということですから、そのような者が救われることは難しいのです。反対に悔いて仏にすがると気持ちさえあれば、五逆の罪を犯した者でも阿弥陀仏は救いの手を差し伸べてくださいます。これが浄土の教えでございます」と親鸞に言わせている。罪の自覚の促しは理解できるが、キリスト教は自覚のない者をも「赦し」の中にあるとする信仰である。